

## 談話室

日本人初の宇宙飛行  
<TBS 宇宙特派員がソ連の  
宇宙ステーションに搭乗>

佐々木 一朗\*

日本人で初めての宇宙飛行が、1990年12月2日に実現します。

これは、東京放送（TBS-TV）が、ソ連宇宙総局と組んで行うもので、民間ベースの宇宙飛行は、世界でも初めてです。

すでに、1989年10月から2人の宇宙飛行士候補が、モスクワ郊外の「ガガーリン記念宇宙飛行士訓練センター」（通称、星の街）で、訓練を受けています。

2人ともTBSの社員で、秋山豊寛（47歳）は、前ワシントン支局長、外信部デスクを務めていました。もう1人は女性で、菊地涼子（25歳）。TBS唯一の女性ニュースカメラマンでした。最終的には、このうちの1人が宇宙に行くこととなります。

## 1. 飛行計画

1990年12月2日打上げ。

## 1.1 打上げ

中央アジアの平原にある「バイコヌール宇宙基地」（ソ連邦カザフ共和国）から、ソユーズ型ロケットで打ち上げられます。乗っていく宇宙船は、「ソユーズ TM-11」（3人乗り）で、あとの2人はソ連人宇宙飛行士です。

## 1.2 ドッキング

ソユーズ TM と宇宙ステーション「ミール」とのドッ

キングは、打上げ後2日+1h後。

## 1.3 ミール滞在

6日間。この間にいろいろな撮影や生放送、二つの実験などを行います。

## 1.4 切離し

地球帰還の約4h前。

## 1.5 帰還・着陸

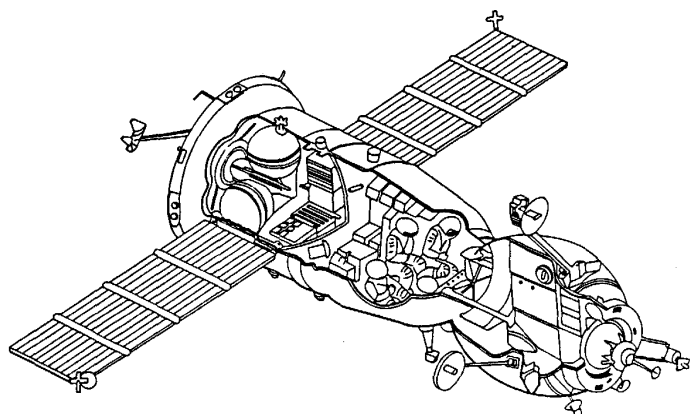
12月10日。

宇宙船は、打上げ後539sでロケットと切り離され、地球を回る軌道に乗ります。その後2回軌道を修正してミールに接近します。宇宙船と宇宙ステーションのドッキングは、原則として自動ですが、時にはうまくいかないで、手動で行われることもあります。

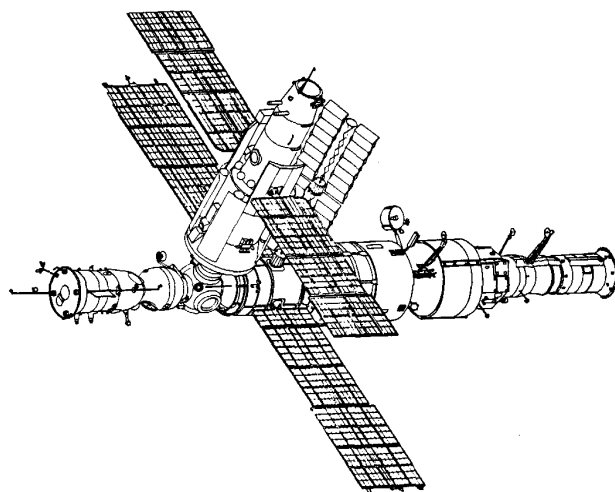
宇宙ステーション「ミール（MIR）」は、1986年2月に打ち上げられ、稼働5年目に入っています。中は約400m<sup>3</sup>ですが、大型のコンピューターなどが場所をとっているため、実際に使える空間は公団の2DKくらいの広さしかありません。その中で、常時4人～6人の宇宙飛行士が住んでいるわけです。これまでの最長滞在記録は、1988年12月に、チトフとマナロフの両宇宙飛行士が作った366日滞在の記録です。アメリカは、過去に84日間の宇宙滞在記録がありますが、現在は、スペースシャトルでわずか7日間程度の滞在しかできません。宇宙についての人類の当面の大目標は、火星に行くことですが、これには往復2年かかります。それに向けての貴重なデータを、ソ連は着々と集めているのに、アメリカは大きく水をあけられているわけです。

## 2. 今回の宇宙飛行の目的

TBS宇宙飛行士＝宇宙特派員による宇宙飛行は、宇宙の時代に先駆けて、どこにでもいる全くフツーの人が宇宙空間に滞在するという点でも画期的なことといえましょう。2人の宇宙飛行士候補は、職業からいえばジャー



ソユーズ宇宙船 (Soyuz)



ミール宇宙ステーション (Mir)

\* 東京放送宇宙プロジェクト室専任部長

ナリストですが、要するに普通のサラリーマンであり OL です。47 歳の秋山は中年のオジンにすぎませんし、25 歳の菊地も、並外れた体力を持っているわけでもなく、入る会社が違えば、あなたの隣でコピーをしたり、書類をファイルしたりしていたかもしれません。そういう人でも宇宙に行けるといいますから、人々に宇宙を身近に感じさせ、大勢の人に宇宙に対する関心呼び起こすいいきっかけになるでしょう。

これまで断片的にしか紹介されていない宇宙での生活も、今回はそのレポートの目的で宇宙飛行をするわけですから、より詳しく、隅から隅まで紹介することができます。このように、宇宙を身近なものにし、人々に宇宙に対する興味を起こさせること—これが、今回のプロジェクトの大きな目的の一つです。

更に、環境破壊で傷ついた地球の姿を、宇宙空間からつぶさに観察し、記録することも、私たちの目的の一つです。宇宙からの地球の観察は、これまでも、米ソの宇宙飛行士が行って来ました。しかし、TBS の宇宙特派員は、専門のジャーナリストです。彼(彼女)は、地球帰還後に、宇宙から観察した場所に直接行って、取材しレポートすることができます。これこそ、科学者やパイロットであったこれまでの“専門的宇宙飛行士”にはできなかったことです。宇宙と地上から、同じ現象を同じ人間が観察しレポートするのは、ジャーナリスト宇宙飛行士だからこそできることです。

宇宙に出て、青く光る地球を見た時、言いようのない深い感動を覚えると、宇宙飛行士はみんな言います。このような感動を味わった後、汚染され破壊された現場に行つての報告は、これまでの数多い環境汚染レポートとはまた違ったものになるでしょう。

日本の宇宙開発は、ソ連・アメリカ・フランスなどに比べて遙かに遅れていますが、21 世紀に向けての成長発展が期待される分野です。しかし、今のところ他の先進産業と違って、自主開発ができにくいところがあります。自主開発をやすくするためには、技術をアメリカからだけ買ってヒモつきになるよりは、フランスがやっ

るように、米ソの宇宙機関と等分につき合つて、自主性を確保する必要があります。これまで 2 回、アメリカと共同宇宙飛行した西ドイツも、1991 年中に、ソ連のミールに乗ることになりました。米ソと等距離でつかず離れずいこうということでしょう。

政府や宇宙開発事業団ベースではしにくい、ソ連の宇宙機関との民間ベースでの共同宇宙飛行は、日本の宇宙開発そのものに寄与できるものになるでしょう。

### 3. 宇宙での実験

宇宙空間を身近に感じさせるよう、TBS 宇宙特派員は幾つかの実験を考えています。どちらもテレビやラジオの番組にして、広く一般の人に見ていただきます。

その一つに、カエルを宇宙に連れていく実験があります。

今までカエルを宇宙に連れて行ってまた連れ帰したのは、世界でも例がありません。さらに、日本での宇宙生物実験は初めての事です。

持っていくカエルは、体長 2~3 cm のニホンアマガエル。1500 匹のカエルの中から 6 匹を持っていく予定で、既に飼育を始めています。

行動力の旺盛な両生類の無重力状態での行動パターンを記録することは、今後、いろいろな生物が宇宙に行く時の貴重な資料になるに違いありません。また、これまで宇宙での実験には何億、何十億の金と、3~5 年の開発期間がかかるというのが、宇宙開発に携わっている人の常識でした。しかし、私たちはそれを 1 年ちょっとの期間と、何百万円かの費用で実現しようとしています。この意味でも画期的な実験となることでしょう。

### 4. 宇宙からの生中継

初めてで、しかも今後も何年もの間ないであろう、日本語での宇宙からの生放送を、飛行中毎日行います。TBS 系列のテレビで毎日 1 回全国放送されるほか、ラジオは 1 日 2 回の宇宙からの生放送が行われます。